

蹴落とされ聖女は極上王子に拾われる

登場人物紹介

ライムート

絵里を助けてくれた中年男性。とても優しく、絵里の好みにばっちり当てはまる。

加賀野絵里

真面目な大学三年生。突然、異世界に召喚された上、途中で同級生に突き飛ばされる。そのせいで、この世界の辺境に落ちてしまった。母子家庭に育ったせいかな、筋金入りのおっさん好き。

シルヴァージュの王子

シルヴァージュ国第一王子。とても華やかな容姿をしている。

ラーレ夫人

シルヴァージュの貴族で、王宮の女官。頼りになる女傑。

シルヴァージュ王

温和な性格で、絵里好みの外見をしている。

ディアハラの王太子

シルヴァージュと対立する国、ディアハラの王太子。

シルヴァージュ王妃

非常に美人で、明るく優しい人物。

片野春歌

かたの はるか
絵里の同級生。本来は絵里が聖女なのだが、現在、春歌がそれを名乗っているらしい。

プロローグ

「なんで、私がこんな……うぶっ……絶対、見つけて……げほっ、文句言って、やるんだから……っ」

余計な体力を消耗しょうもうするとわかっていても、どうしても声を出してしまう。声に出して自分を鼓舞こぶしなければ、海の藻屑もくずになつてしまいそうだ。懸命に水をかきながら必死の思いで決意を語る。

そんな彼女——加賀野絵里かがのえり、二十一歳、某大学三年生——がいるのは、広大な海のど真ん中であつた。

とあるトラブルに巻き込まれた結果、いずことも知れない空中に放り出され一直線に落下して、たどり着いたのがここである。

数十メートルの高さから海面にたたきつけられれば、その衝撃はコンクリートに衝突したときに匹敵するという。普通であれば全身骨折に内臓破裂だが、それ以上の高さから落ちたにもかかわらず、絵里はそういった目には遭あわなかつた。

なぜかはわからない。もしかすると、件のトラブルの原因となつた存在が何かをしてくれたのかもしれないが、だったら落下地点を変えてほしかったと彼女は切実に思った。

落下の衝撃は大したものでなかったとはいえ、海中に深く沈んで上下の感覚を失ってしまい、浮き上がるまでの間、真剣に死を意識した。やつのことで海面まで浮上し、呼吸ができたときはしみじみと空気のありがたさを実感したものだ。

しかも、はっきりと確認できたわけではないが、海の中に何やら巨大な影が見えた気すらする。鯨ならまだいいが、鯨のように人を襲う生き物だったらと想像して、絵里は水を掻く手に力を入れた。

当然、手にしていたはずの通学用トートバッグは影も形もない。おそらく中身もろとも海の底に沈んでしまったのだろう。

突然、着の身着のまままで海に放り出されたという踏んだり蹴つたりの状況ではあるが、希望がないわけではない。かなり遠くではあるものの、陸地らしきものが見えている。まずはあそこまで泳ぎ切るのが目標だ。

着いた後どうするかは、そのときに考えればいい。

しかし、小さいころスイミングスクールに通っていて、泳ぎにはそこそ自信のある絵里だったが、二十五メートルのプールを往復するのはわけが違った。水温は低く、穏やかとはいえ流れがある。何より着衣のまま泳ぐのはかなりの体力を消耗した。

それでも海中で服を脱ぐのは大変だし、上陸後、代わりのものが手に入るとは限らない。幸い、絵里が着ていたのは長袖Tシャツにジップアップのパーカー、ストレッチジーンズにハイカットのスニーカーで、水の抵抗が比較的少なかった。

「とにかく……あそこ、まで……うつつぷっ」

じりじりと位置を変える太陽に若干焦りながらも、彼女はクロールと平泳ぎを交互に使い、少しずつ前に進み——やがて、日が傾き切る前にスニーカーの底が柔らかな砂地に着いた。

安堵のあまり涙を流し、そのままよろよろと数メートルを進んだものの、全身が水から出たところで体力と気力が尽きてしまう。

「……ちよつと、だけ……、ちよつとだけ、だか、ら……」

だれに向かって言い訳しているのか、本人にもわかっていなかったが、そんなセリフを口にした直後、絵里はどうとう意識を手放した。カクリ……と力なく砂地に倒れ込む。

故にそのほんのわずかの後、近くの茂みがかさがさと揺れ、小さな悪態と共にだれかがその場を姿を現したことも、その人物が倒れ伏す絵里を視界に入れて慌てて駆け寄ってきたことも、知ることはなかった。

『……私が呼び寄せたのは一名のはず。なのに、なぜ、ここに二名が存在する？』

どこからか聞こえてきた知らない声に、絵里は周囲を見回した。なぜか、真つ白な空間にいる。確かほんの一瞬前まで、自分は大学のキャンパスにいたはずだ。今期の単位のためのレポートを提出しようとして教員棟に向かっていたときに、同級生である片野春歌に遭遇し、それを奪われそうになったので必死になって抵抗していたところである。

ちよつと参考にさせてもらうだけで直ぐに返す——そんなことを言われたが、それを信じたところ丸バクリされた過去があるので、当然、断つたのだ。

そもそも、春歌という娘は甘つたるい容姿とかわい言動で男子には人気があるが、女子には自分勝手な横暴ぶりをいかなく発揮していて、はつきり言つて嫌われている。

その上——と、思ったところで、もう一度、先ほどの声が聞こえた。

「……だ、だれっ？」

『我か？ 我は****だ』

「は？ 何、わからない……？」

『で、あろうな。其方に理解できる概念に置き換えれば神、或いは管理者といったところか。そし

てここは、私の管理する世界と、今から其方が向かう世界の狭間の空間だ。其方に頼みたいことがあつて——』

声は、よくわからないことを話し始める。

「はい？」

『理解できぬか？ まあ、よい。向こうへ行けば自ずとわかるだろう。それよりも、問題は其方の付属物だな。本当に、なぜにこのような事態になったものやら……』

まったく見知らぬ場所、正体不明の相手からわけのわからないことを言われ、さらには愚痴っぽいものまで聞かされている。

——私、なんか悪いことしたっけ？

とにかく状況を説明してもらおうと、絵里は口を開きかけた。そのとき、視界に見覚えのある人物が入る。春歌だ。

どうやらこの不思議な声は彼女にも聞こえているようだった。話が進むにつれ、その表情が困惑から怒りへと変わっていく。その拳句に——

「あなたのせいよ！ あなたのせいで……っ」

どんつ、という衝撃を背中に感じ、絵里は止まり切れずに床に手をついた。

『何をする!? 早く戻るのがだつ。転移陣から出ては……』

慌てた声が聞こえたが、それに従うよりも早く、たつた今まではずの床が消滅した——

「——っ!？」

意識が戻ったのは、ひどい夢のせいなのか、それとも冷え切った体が温められて、手や足の先がちりちりとした痛みを訴え始めたからなのか。

どちらなのかは判然としないが、むず痒い感覚が絵里にそれ以上の眠りを妨げた。まだ幾分ぼんやりとしていた意識が急速に覚醒する。

まず、最初に気が付いたのは『寒さ』と『温かさ』という、相反する二つの感覚だ。

冷たい海水に何時間も浸かっていたために、絵里の体は冷え切っていた。

どうにか無事に浜辺まで到達し意識が遠のく寸前、ひどい寒さを感じていたのは覚えている。そして、今もまだ寒い。けれど、先ほどに比べればかなり軽減されていた。

また、体幹部分はそこそこ温かく、そこから温められた血液が循環することにより、少しずつ改善されていつている。痛みと痒さは、そのせいだろう。

まるでしもやけになってしまったときのように、耐え切れないほどの痒みをつま先に覚えた絵里は、無意識に小さく足を動かした。

「お？ 気が付いたか？」

不意にかけられた声に、ぎょつとして飛び起きようとする。が、彼女の体は大きな布にぐるぐるに包まれていて、身動きができなかった。その上、今、この瞬間まで全く気がつかなかったが、だれかにしっかりと抱きかかえられている。

多少動いたくらいではその拘束から抜け出せないことを悟った絵里は、悲鳴を上げようと口を開

いた。身動きはとれないが、至近距離で思い切り叫べば、この不審人物がひるむかもしれない。

「っ、き……あ、けほっ、こほっ」

けれど、残念なことにこちらも不発に終わった。

悲鳴どころか、かすれた声しか出せない。

「大丈夫か？ かなり海水を飲んでるんだ、喉も荒れてるはずだぞ」

激しくせき込む絵里の背中を、大きな手がゆつくりと撫でてくれる。その手はとても優しく、悪意のかけらも感じられない。

「気が付いてよかった。喉がつかいだろう、水は飲めそうか？」

その声は低く男性的であるものの、絵里をおびえさせまいとしてか、とてもおだやかだった。「ほら。ゆつくり飲むんだぞ」

少し落ち着いたところで、木でできた器が目の前に差し出された。絵里はせき込みながらも頷く。反射的に受け取ろうと手を動かすが、腕も体と一緒に布に巻き込まれている。どうしよう、と困っていると、声の主が器を口元まで運び、ゆつくりと傾けてくれた。

重病人でもあるまいに……と、気恥ずかしく思った絵里だが、相手の言うようにひどく喉が渇いている。水分補給の必要があるのは明らかだし、何より、ひりつくような喉の痛みが耐えがたい。彼女はそつと口を開いた。

「ん、う……ぐっ、くふっ！ け、ほっ」

「こら、ゆつくりと言っただろう」

ためらいがちに一口飲んだ後は、もう歯止めがきかなかった。器に食らいつくようにして一気に飲み込み、案の定、むせかえる。

しかし、器を差し出してきていた相手は、あきれたような声を出しながらも、激しくせき込む絵里を優しく器抱してくれた。そして、落ち着いたところで、また器を差し出す。今度は絵里も慎重にそれを喉に通していった。

一杯では足りず、お代わりも同じように飲み、やっと人心地ついた絵里は、そこで非常に大事なことに気がつく。

——ここはどこか、この人はだれとか、ではない。

——まだ、相手にお礼の一つも言っていない。これはとんでもないことである。早急に、改善を図らねばならない。

——どうやら、自分はこの人に助けてもらったようだ。

海難事故に遭った者は、必死に岸にたどり着いても、その後で衰弱して死んでしまうことがままあるらしい。自分がそこまで重篤な状態だったかどうかは不明だが、あのままだったら風邪くらしいは引いていたかもしれないし、直ぐに飲み水を見つけることができたかどうか不明だ。

状況を見るに、この人物が冷え切っていた体を温めてくれたに違いない。

目の前にはばちばちと燃えている焚火があり、岩場の一角らしくうまい具合に風が遮られている。潮騒の音がするので、海岸からはさほど離れていない場所なのだろう。

わざわざこんな手間をかけずとも、スマホで救急車を呼んでくれれば早かっただろうに、どちら

りと浮かんだが、直ぐに打ち消した。助けてもらったことに変わりはない。

絵里は母から基本的な礼儀として、『ありがとう』と『ごめんなさい』をしつかりと躰けられた。早くに亡くなった父も、『かけた恩は水に流せ、受けた恩は石に刻め』という言葉座右の銘にしていたと聞いている。

なのに、今までの自分の行動はといえば、状況を把握できていなかったとはいえ、悲鳴を上げることと水を飲ませてもらったことのみだ。

もともと、ぐるぐる巻きは頭部にも及んでおり、絵里の視界は非常に限られたものになっている。周囲の様子は見渡せるものの、視線を上げるのが難しい。

お尻の下がごつごつしているのは、件の人物が胡坐を組み、その上に横抱きの状態で乗せられているせいらしかった。いや、そんなことは後でいい。

お礼を言うのなら、きちんと相手の眼を見ながらだ。そのためには体の向きを変える必要がある。もぞもぞと身動きをし始めた絵里に、相手は少し驚いたようだが、最初のとときは違い落ち着いているのを悟ったのか、素直に腕の拘束を緩めてくれた。

ぐるぐる巻きのために体のバランスを保つのが難しかったが、そこは根性で相手の体から少し距離を取る。そして、なんとか相手の顔が見えるようになった絵里の眼に最初に飛び込んだきたのは、もじやもじやした髪だった。

金褐色、とでもいうのだろうか。金というには赤味が強く、また茶色というにはいささか明るすぎる色合いだ。それが鼻から下、もみあげからあごにかけての大部分を覆っている。そしてその間

に埋もれそうになっている唇は、荒れてかさかさしていた。鼻はすつきりと高く通っているのだが、その周りの皮膚は日焼けのせいとか、やはりかさついていて少し皸かさもよっているようだ。

さらにその上——髭ひげと同じ色の髪も、あまり手入れができいないようではさばさだった。しかし、脂あぶらぎっていたり変なおいがしたりするわけではない。それなりに気が配られていて、その髪の間から覗く瞳は青——いや、わずかに灰色が混じっている。

年のころは四十を少し越えたくらいだろうか。彫りの深い顔立ちのため、一見すると怖そうな印象を受けるが、それを裏切るほどく優しい眼差まなざしで絵里を見下ろしていた。

「あ、あの……」

まずは助けてもらったお礼を言おう。それから、ここがどこか教えてもらいたい。そう思っていた絵里だったが、自分を抱きかかえている相手の顔をしっかりと認識した途端、その舌が凍り付いた。

——やばいつ、何これっ……!?

一瞬にして、絵里の脳裏のうりに飾られていた初恋である小学校の教頭先生や、「素敵！」と思っていた大学の教授、その他、大好きな国内外の渋い俳優陣、全部が吹っ飛ぶ。

文字通り目と鼻の先で、少し困ったように微笑ほほえんでいるのは、まさに理想がそのまま形をとったような男性だ。

そう、彼女——加賀野絵里は、筋金入りの『枯れ専』、或いは『おじ専』なのであった。

そうなった理由は色々あるのだが、それはさておき、目の前にいるのは渋い男前。少しくたび

れた様子がなよなよとした若いイケメンには出せない色気を感じさせる、彼女の好みと真ん中をぶち抜く存在だ。

「……どうした？ どこか、具合が悪いか？」

突然フリーズしてしまった絵里を不審に思ったのか、男性が問いかけてくる。改めて聞くその声も低く男性的で、容姿の印象そのままにわずかにかすれている。声すら理想的だ。

うつとりと聞き惚ほれていた絵里だったが、声をかけられたことで再起動を果たした脳が、やるべきことを指示してきた。

「い、いえ。大丈夫ですっ！ それより、あのっ……助けてくださってありがとうございますましたっ」頬が赤くなり、まだ嘔かれている声が上がありついているのが絵里自身にもわかってはいたが、一息で告げることでも当初の目的を達成する。

「ああ、なんだ、そんなことか。気にするな、ちようど行き合った縁ゆかりってやつだ——それよりも腹が減へつてないか？ あんたの服は乾かわくのものもう少しかきそうだし、何か食べそうなら、腹に入れておいたほうがいい」

男性は見かけだけでなく、中身も男前だった。助けたことを恩に着せるでもなく、さらりと流した後、彼女を気遣きづってくれる。

そのことにまたも感激した絵里だったが、そこでとあることに気が付いた。

——服？

その単語に引っかかりを覚え、ごそごそと布の内部を確認する。その結果、声にならない悲鳴を

上げることになった。

絵里の喉がまだ回復しきつていなかったのは、不幸中の幸いというべきだろう。男性の耳元で金切り声を上げる事態にはならなかったのだから。

「全身ずぶ濡れで冷え切っていたからな。変わった衣装で脱がすのに苦労した。あんたの裸を見てしまったが、そこは仕方ないと勘弁してくれ」

「いえ……私こそお手間をかけてすみません。重ねて、お礼を言わせてください」

低体温症になりかけていたため濡れた服を脱がせる、必要だったからやった。実にシンプルな動機であり、行動だ。

その過程で絵里の裸身を目にするようになったわけだが、それについて変にごまかしたり、照れたりする様子はない。若造ではこうはいくまい、さすがに年の功だ。

おかげで絵里も早めに落ち着くことができた——ついでに、「この人になら見られても……ああ、でも私ガリだしペチャだし、がっかりされたりしなかった!」とか余計なことを考えていたのは気付かれてはいはずだ。

その絵里だが、まだぐるぐる巻きのままなものの、男性の膝からは下ろされている。地面に直接敷いた畳一畳分くらいの敷物の上に、並んで座っている状態だ。

目の前には、赤々と燃える焚火があり、二人の反対側には彼女が着ていた服が並べられている。パーカーや長袖Tシャツはともかく、下着も同じ扱いをされているのは地味にダメージが大きい。そこは努めて気にしないようにするしかない。小さな布切れが風で飛ばされないように石をの

せてくれているところを見ると、男性はかなり気も利くようだ。

そして、そこでやっと絵里は、自分がまだ命の恩人に名乗りもしていなかったことに気が付く。

「あの……私は加賀野絵里という日本人です。加賀野が姓で、絵里が名前です。絵里・加賀野と言ったほうがいいのかな？ 名乗るのが遅れてすみません」

「リイ・クアアノ？ いや、エリイか？ すまん、うまく発音できません。その国の名は聞いたことがないし、名前も変わってるな。ああ、俺はライムート・シルヴァ。ライでいい」

絵里を助けた男性は、見た目からして日本人に見えなかったが、名前も外国風だ。絵里の名も妙な感じに変換されたが、とりあえず呼びやすいように呼んでくれればいいのでそこは流しておく。

というよりも、流さざるを得ない。なんとすれば、それらのやり取りにより——加えて周囲の様子から、確信したことがあった。

「どうやらここは、日本——いや、『地球』ではないらしい。」

例の『声』にそれっぽいことは告げられていた絵里だったが、そう考えた一番の理由は、このライとの会話だった。

なぜか日本語が通じている。しかも彼は、生粋の日本人である絵里が聞いてもまったく違和感のない発音で、日本生まれの日本育ちと言われても信じてしまいうまくないである。ただ、よくよく観察してみると、絵里の耳に届く『音』と、ライムートの口の動きが違う。つまり、絵里には『あ』という音が聞こえるのに、口は横に開かれているとかそういうことだ。

さらには、ライムートはどうやら『日本』を知らないらしい。

日本を知らないのに日本語をしゃべる。

何やら自分の身に妙なことが起きていることを、絵里は理解した。

加えて、ライムートの所持品だ。

ざっと見回した限りではあるが、そこに彼女のよく知る『文明の利器』はまったくない。先ほど水を飲ませてもらったのは木製の器だったし、その水の出どころは革の水袋である。間違ってもステンレス製の水筒ではない。その他にあるのは、粗布でできたリュックに似た鞆と馬の鞍らしき物体。そして、彼の傍らの地面に置かれた『剣』だ。

今どき、剣を所持する人間がいるだろうか。おそらくこの国でも、一発で官憲が飛んでくるに違いない。気合の入ったコスプレ、と無理やり考えようにも、だったらここはこのイベント会場だという話だ。

あり得ない。

そのあり得ない事態が、現在進行形で自分の身に起きている。絵里は呆然とした。

名乗った後で急に黙り込み、何事か考え込んで、だんだんと顔色を悪くしていく彼女を、しばらく見つめていたライムートが、やがてぼつりと口を開く。

「どうやらわけありらしいが、とりあえず今は安全と認めてくれ。まあ、俺みたいなムサイい親父が何を言っても信用できんかもしれんが」

「いえ、そんなっ……」

「本当なら町まで連れて行くほうがいいんだろうが、リィ——でいいな。お前さんの服もまだ乾い

てない上に、そろそろ日が沈む。命にかかわる事態でもなきや夜に動くような真似はしたくないんで、今夜はここで野宿だ。ああ、寝てる間に襲われないかとかは心配するなよ？ さすがに、子どもに手を出すほど飢えちゃいない」

今まで短い言葉しか口にしなかったライムートだが、結構饒舌であるらしい。相変わらず絵里の耳に届く音と口の動きはマッチしていないが、よどみない声の調子や口調からして、嘘をついているようには見えなかった。

それにしても、何げに絵里は子ども認定されているらしい。裸を見られた上でのその判断に、こつそりと落ち込むものの、今はそこにこだわっている場合ではなかった。

「あの……私のこと、聞かないんですか？」

「ああ？ 聞いてほしいっていうのなら聞くぞ。で、リィは話したいのか？」

質問したのは絵里だが、あつという間に立場が逆転してしまう。改めて問いかければ、思わず考え込んでしまった彼女に、ライムートはわずかに苦笑しながらさらに言葉を続けた。

「ま、とりあえず飯でも食おう。腹、減ってるんじゃないか？ ろくなものはないが、腹ペコでいるよりはましだと思っぞ」

そう言いながら、粗布の鞆に手を伸ばす。ごそごそと中を漁っていたが、やがて薄茶色い干からびたものと、焦げ茶色の塊を取り出した。

「食ったことはあるか？ ない？ ……そりゃ運がいい。少しずつかじって、じっくり噛んでから呑み込むんだぞ」

まるで子どもに言い聞かせるように言った後、薄茶色いものを掌てのひらの半分ほどの大きさに引きちぎる。

焦げ茶色のほうはやはりバッグから取り出した小刀で切り分け、拳こぶしより少し小さめの塊かたまりにして、ぐるぐる巻きからどうにか手だけ出した絵里に渡してくれた。

どうやら、何かの肉を干したものと、パンのようだ。しかし、干し肉はともかく、パンはその大きさからは意外な程ほどにずっしりと重い。切り口を見てみると、絵里のよく知るパンにある発酵の痕跡せきせきがない。単に穀物を挽ひいてこねて焼いただけのものらしい。

それでも、そろそろ空腹が限界になりつつあった彼女は、恐る恐るそれを口に運ぶ。

味は……お世辞にもおいしいとは言えなかった。保存を第一に考えられているみたいで、干し肉は香辛料などを一切使っていない塩辛だけのもの。しかも、お湯に入れたらそのまま塩味スープができるのではないかとというくらいに塩がきつい。減塩などは、対極にある物体だ。

パンはパンで、堅い上にぼそぼそしていて、あつという間に口の中の水分を全部持っていかれた。絵里は慌てて水を含んで、ふやかしつつ、何度も咀嚼そじやくする。そこでやっと呑み込めた。

「まずいだらう？ どうしても無理なら残していいんだぞ？」

「いえ、いただきます。ありがとうございます」

ここが絵里のいた『世界』と異なることは間違いない。ライムートの所持品を彼女の知る限りの歴史的知識と引き合わせると、どうも中世ヨーロッパ程度の文化だと思われる。

それはつまり、現代の日本のようにちよつと歩けばコンビニがあつたりはせず、人里離れた場所

で手持ちの食料が尽きれば、死ぬ可能性があるということだ。

そんな貴重な食料を分けてもらったのだから、味がどうこうというのは贅沢ぜいたくを通り越して傲慢ごうまんでさえある。

「あの……ライ、さん」

「ん？ さんはいらんぞ、ライでいい」

「いえ、年上の方を呼び捨てにするのは抵抗があるので……で、ライさん。食べながらで、失礼してしまふんですけど」

「どうした？」

「話、聞いてもらえますか？」

ほんの少し前まで迷っていた絵里だったが、あまりにもまずい食料で決いがついた。覚悟が決まったというべきかもしれない。

まったくの見ず知らずの——命の恩人ではあるのだが、それ以外は名前しか知らない相手に、洗いいざらい身の上を話すのは避けるべき行為かもしれないが、そんなことは関係なかった。

命を救ってもらい、食べ物まで分けてもらったのだ。しかも、明日の朝まで身の安全を保障してくれるという。そんな相手に隠し事をしたままで平気な顔をしていられるような性格を、絵里はしていない。

目の前の彼は、優しい態度だが実は腹の中では別のことを考えているかも、いや、あまりにも奇想天外な話を気味悪きみわるがつて自分を追い払うかもしれない。

そんな可能性が一瞬、頭をよぎったのは事実だが、それでも聞いてもらおうと決めた。ライムトが助けてくれなかったら自分は死んでいたかもしれないのだ。

何より、こんなことを自分一人の胸のうちにしまっておけるほど、絵里のメンタルは強くない。精神面の安定を考えても、ここはひとつ、全部話してしまったほうがいと心を決める。

「ものすごく妙……というか、信じられないような話なんですけど、決して嘘はついてません」

そう前置きして、堅い干し肉とパンを苦勞して呑み込む合間に、絵里は自分の身に起こったことを、ライムトに少しずつ話し始めた。

「——実は私、神様にここに連れられてきたみたいなんです」

そう口に出した途端、絵里は自分の説明能力のなさに頭を抱えた。いきなり『神様』はないだろう。

案の定、ライムトは目を見開いて『こいつ正気か?』といわんばかりの顔になった。その表情をなるべく見ないようにして、絵里は言い訳じみたセリフを口にする。

「一応言っておきますけど、今のところ、自分の頭は正常に動いていると思ってます」

「ああ、受け答えからして、それは俺も感じる。すまんな、少し驚いただけだ。続けてくれ」

ライムトは、絵里の言葉を頭ごなしに嘘、或いは変人のたわ言と決めつける気はないようだ。

そのことにほっとして、今度はもっと慎重に話す内容を吟味しつつ、彼女は話を続ける。

「えっと、まずは私のことを説明します。私は日本という国で生まれて、その大学という教育機

関に通っていた学生です。家族は……両親がいましたが、今はどちらも亡くなって、親戚とかあんまり知らないのです、所謂、天涯孤独ってやつですね」

絵里の身の上は、昨今の女子大生にしては結構ハードなものだ。

幼いころは、勿論、両親がそろっていた。父親はある会計事務所に勤める会計士で、母は看護師という、忙しいながらも幸せな家庭。それが変化したのは、絵里が幼稚園に通っていたころである。通勤中の不慮の事故により、父が他界したのだ。

幸いなことに、保険金や各種の社会保障があり、また、母が看護師という母子家庭において最強ともいえる資格を持っていたため、経済的な不自由はほとんどなかった。

ただ、再婚もせずに一人で自分を育ててくれる母の背中を見て育った絵里は、横道にされることをよしとせず小中高と無難に過ごして、とある福祉系の大学に合格する。

絵里としてはそこで取れる限りの資格を取って、苦勞してきた母に卒業後少しでも恩返しをと考えていた。けれど、ここで二度目の不幸に見舞われたのである。

母が、いきなり倒れたのだ。絵里は大学二年生になったばかりだった。母は看護師で毎年、健康診断を受けていたのだが、健診の間に悪性の腫瘍が発生していたのだ。

余命は——わずか半年。正にあつという間の出来事だった。

当然、悲嘆にくれた絵里であったが、母の最期の願いにより学業を最後まで続け、『自分自身の幸せ』をつかむための努力を進めようとした。

「学費——学校に行くための資金は父や母が残してくれていましたし、私も二十歳になっていたの

で、苦労はありましたけど学業を続けました。このまま卒業して、どこかに就職してって思ってたんです。けど、大学のキャンパスを歩いてたときに、同級生の一人に絡まれて——担当の教授に提出しようとしてたレポートをその彼女に奪われそうになりました」

「彼女……女か。そいつは盗賊か何かか？」

「いえ、そうじゃないんです……レポートもわかりづららかな。えっと、研究結果みたいなのです。で、それを横取りしようとしたんですよ。彼女には前にも同じことをされてたんで、当然、私は抵抗しました。それで、もみ合つてるときにですね、いきなり足元に変な光が湧いて……気が付いたら、どこもかしこも真っ白な場所に立っていたんです。そこで『神』と名乗る相手に、無茶苦茶なことを言われたんですよ」

自分の身実際に起こったことであるのに、口に出してみると荒唐無稽としか言いようがない。だが、それでも事実は事実なので、それらの出来事を絵里は素直に口に出す。

「なんでも、私たちの世界から、こつちの世界に魔素？ マナ？ とかいうものを送る必要ができて、その運搬係に私を選んだとか何とか……」

「マナ？ そいつは、本当にそう言ったのか？」

「え？ ええ——えっと、そのままじゃないんですけど、大体はそんな感じでした」

あり得ない状況に混乱しきっていたために、うる覚えだが、懸命に記憶を掘り起こして我が身に起こったことを説明する。

「私たちの世界——地球には、そのマナとかいうのがすごくいっぱいあるんだそうです。ところが

あまりにも増えすぎて、環境に悪い影響が出そうになったので、足りてないところに送りたい、とでも、そのマナだけを送ることはできず、だれかに託す必要があつて、それで家族のいない私を選んだって言っていました」

さらに付け加えれば、移動は一方通行であり、元いた世界に戻ることはできない。そのために天涯孤独な者を選び、たまたまその役割を絵里が果たすことになった、という次第だ。

本来であれば転移後、絵里とはある国で大切に育てられる予定だった。それが、彼女の世界の神からマナの移譲を持ち掛けられた、こちらの世界の神によるアフターケアだということ。ところが、だ。

「本当は私だけのはずだったんですけど、どうしてかもう一人、移動させちゃったらしいんです。神様が言うには、もみ合つてたおかげでその人——私のレポートを盗ろうとした相手に片野春歌って人なんですけど——その人が私の付属品みたいな感じに判断されたらしくって。それで、そのことも踏まえた上で神様が話していた途中で、彼女がキレちゃって……そこから出るなって言われてた光の模様の外に、私を突き飛ばしたんです。そしたら、なんか神様が慌てだして、早く戻れって言われたんですけど、そうする前にいきなり足元がなくなつて——」

気が付けば、何もない空中に放り出されていた。当然、重力に従い落下一直線だ。

落ちた場所が海だったのは不幸中の幸いかもしいれないが、潮れかけ陸に着いた途端に気を失う羽目になったのだから、やはり不幸といえる。

その話を聞いたライムトは、絵里が言う『光の模様』とは、転移陣の一種だろうと言った。彼

曰く、こちらには『魔法』というものがあるそうだ。

けれど今はそれ以上教えてくれず、絵里に話の続きを促した。

「海面にたたきつけられて死ぬってことはなかったんですけど、ホントに何度も死を覚悟しました。泳いでいる間に鮫か何かが来て、一呑みにされちゃうかもって生きた心地がしなかったです。けど、潮目がよかったのか、なんとか岸までたどり着けたんですよ」

そして、気を失っていたところを目の前のライムートの拾われた、というわけである。

「なるほど……いや、全部を理解したわけではないが、とりあえず苦労したのはわかった」

「ありがとうございます」

なんとも微妙なライムートの言葉だが、自分自身でも完全には理解できていないことを、そう言ってもらえるだけで十分だ。

「すみません、説明が下手で……」

「いや、どんなに言葉巧みに話されても同じだったろう……で、とりあえず、リイ。お前さんも二十歳を過ぎてるつてのはホントか？」

まずはそこですか、と。絵里は心の中であぐらと膝をつく。それでもライムートがある程度、彼女の身の上について理解を示してくれたことに安堵を覚えた。

「本当です。今年で二十一になりました。私がいたころでは二十歳が成人の区切りで、それ以上大人として扱われています」

「つてことは、本当に大人なんだな……しかし、それでいて学生？ リイは女だろう？」

彼のこの質問で、ここが男尊女卑な世界であるらしいことが絵里にはわかった。中世あたりの価値観であれば当然のことだろうから、それについて反駁したりはしない。

「私がいたころでは、男女平等に学ぶ権利が与えられているんです。ですから、女性であっても希望すれば学校に通うことができます」

「口調からして、学があるつてのは本当のようだし……成程なあ」

二人とも食事は終えていて、今はばちばちと爆ぜる焚火を見つめながらの会話になっている。

既に日はとっぷりと暮れ、周囲は真っ暗だ。街灯はおるか民家らしき明かりの一つも見えない漆黒の闇に寒気を覚えた絵里は、そっとライムートに身を寄せた。

「怖いのか？」

「ええ……ちよつと。こんな真っ暗なんですわね、こつちの夜つて」

「夜が暗いのは当たり前——でもなさそうだな。リイの世界の夜はどんなだったんだ？」

「国や地域にもよりますが、もっと明るいですよ。少なくとも私が住んでいたところはそうでした」

道路には街灯があり、家から明かりが洩れ、ネオンサインや車のヘッドライト等が輝く。それらが当たり前だと思っていた絵里にとつて、この原始のような夜は驚きである。

体を丸めて小さくなっていると、その頭にそっとライムートが手を伸ばしてきた。

「そう怖がるな。何かあってもリイのことは守つてやる」

その手は節くれだつているし、掌にいくつもタコがあつて、がさついた感触がする。それなり

の年数を生きた者の手だ。

それが、思いがけないほどの優しい動きで絵里の頭を何度も撫でた。誤解を解いたはずなのに、まだ子ども扱いされている気がして不満だが、それでもその感触は心地いい。

「心細いだろうが、少なくとも今は俺がいるから、な？」

そう言いながら、カサついた皮膚に小さな皺がいくつもよった顔を優しく微笑ませている。

ほ、惚れてまうやろーつ、とは絵里の心の叫びだ。既に一目惚れ状態なのだから、さらに惚れ込んでしまう、というのが正解だろうか。

理想の塊のような相手にこんなことを言われて、夜の闇への恐怖も、これから先どうなるのだろうかという不安も、一時的に絵里の頭から消えていた。

「つてことで、今夜のところは寝ておけ。疲れてるだろうし、暗い中であれこれ考えたって、ろくなことにならん。続きはまた、明日だ」

その言葉に素直に頷き、絵里はライムートに体をもたせかけて目を閉じたのだった。

翌朝、日が昇るのとほぼ同時に絵里は目を覚ました。

眠りについたときには座った状態だったはずだが、気が付けば敷物の上に長々と体を伸ばしている。その下は地面で決して寝心地はよくないのだが、目を閉じてから今までの記憶が一切ないことを考えると、熟睡してしまっていたようだ。しかも相変わらずのミノムシ状態。

この状態でよく爆睡できたな私、と思ったところで、彼女はとんでもないことに気が付く。

——あれ？ 確か、こういうときって交代で見張りとかするもんじゃ……？

原始的な野営の知識などないが、子どもころに読んだ金の指輪を火山の火口にぶち込むために旅をする某古典ファンタジーだと、そうだったはずだ。

絵里は慌てて飛び起きた。その際に、蓑——布に足を取られて転びかけたのはご愛敬だ。詫びを言おうとライムートの姿を捜すが、見あたらない。

おいて行かれたとは思わなかったものの、彼の不在に自分でも意外なほどの心細さが湧き上がる。ぐるぐる巻きの布を足部分だけたくし上げ、なんとか立ち上がると、素足のままで敷物から降りた。ライムートを捜しに行こうとしたところで、声が聞こえた。

「起きたか？ 体の調子はどうだ？」

快活に笑う髭面は、朝の光の中で見ても、(絵里にとつては) 洪くて素敵な男前だ。うっかり見とれそうになる気持ちを引き締めて、朝の挨拶を口にする。

「お、おはようございます。すみません、ずっと寝ちゃってたみたいで、その……起きたらライムートがいなくて……」

絵里の言いたいことに気が付いたのか、笑顔のままライムートが言う。

「すまんな、ちよいと周囲を見回ってきたんだ。このあたりはそれほど危険なところじゃないんで、俺もそこそこ眠れたから気にするな」

そこそこ、ということはやはり夜の間に、ライムートが一人で周囲を警戒してくれていたらしい。

「立ち上がれるなら、体のほうも大丈夫だろう。安心したぞ。それなら、顔を洗いたいんじゃない

か？ 近くに水場があるから、着替えたら一緒に行こう」

改めて謝罪を口にする前にどんどん話が先に進み、絵里はその機を逸してしまふ。それに、顔を洗えるというのは魅力的だ。

昨日のことを思えば当たり前なのだが、体中が潮くさい。髪の毛もなんだかじわりじわりする。絵里はライムートの提案に飛びつき、結局、謝るチャンスを逃した。

ライムートを待たせなくなかったので、焚火ですっかり乾いていた服を手早く身につける。その間、ライムートはちゃんと後ろを向いてくれていた。

意外なことに、服はあまり潮のにおいはしなかった。もしかすると、絵里が気を失っている間に水洗いでもしてくれたのかもしれない。

「できました」

「おう、ならいくか」

用意が整ったと告げると、そのままライムートが歩きだす。その後ろを追った絵里は、そこで初めて一夜を過ごした場所の周囲を確認した。

少し離れた場所にある波打ち際は砂で、絵里たちがいた岩陰あたりから土と緑がまじり始める。

海は青く、また空も青い。日差しはやや強く、夜の間もそれほど冷えなかったことから初夏、或いは初秋だと思われた。穏やかで過ごしやすそうな気候だ。足元にある植物も生き生きとしている。

「きれいですね……」

思わずつぶやいた絵里に、ライムートが苦笑しつつ答えてくれる。

「まあ、今はそう見えるな」

「今は、ですか？」

「ああ。つい先日——というか、おとといまではこんなふうじゃなかったぞ」
歩きながらライムートが説明する。

「天候が不安定で、海は荒れ、作物の実りも芳しくなかった。別にこの辺だけの話ではない。ここ数年、どこも同じようなものだ。おかげで、旅をするにも難儀したもんだ。ところがな……」

昨日、彼は海沿いの街道を移動しており、ふと海に目をやると、天から何かが落ちてくるのが見えたと言う。昼でもたまたまに見えることがある流星かとも思ったが、何やら胸騒ぎがしたために、確認しようと海岸に進路を変えたのだそうだ。

「……それって、まさか？」

「リイだったのかもしれない——おっと、ここだ。体も洗いたいだろう？ 覗いたりほしないから安心していいぞ」

ライムートの言う『水場』は、岩の間からちよると水が湧き出て、それが小さな水たまりになっているところだった。流れ出ていく先がないのは、地面に染み込んでいるせいだろう。体を浸せるほどではないが、潮まみれの体をきれいにするには十分だ。

「ありがとうございます。じゃ、遠慮なく」

「……そこまで信用されると、却って覗きにくいな」

「覗く気だったんですか？」

「いや、そういうわけじゃないが……まあ、その話はいい。それより、さっきの続きだ」

言いながら、ライムートは背を向け少し離れたところで座り込む。「別にライさんになら、もう見られた後だし……いや、でもやっぱりこんな貧相な体じゃ……」という絵里のかすかなつぶやきは、その耳には届かなかつたようだ。

「それでだな。俺が行った海岸はいつも通り荒れてたんだが、その先の海が……なんていうか、久々に晴れて、波も信じられないくらいに穏やかになってた」

沖の一部分のみが穏やかに晴れ、しかもそれが次第に広がっていったという。彼は信じられない思いで、かなりの時間、その様子にきぎ付けになっていたらしい。そして、ようやく我に返ったところで、海岸からやや離れた場所を泳ぐ人影を発見した。

そのころにはライムートの立っている海岸にまで変化が及んでおり、もしやその人物が何かを知っているのではないかと考えて近づいたのだ、と説明する。

「俺がそこへ到着する少し前だな、ライが陸にたどり着いたのは。急いで行ってみたら、気を失ってるし、体は冷え切ってるしで……」

それで、とりあえず疑問は置いておいて、絵里の救命を優先してくれたのだという。

「私、運がよかったですね……本当にありがとうございます」

「気にするな。旅をしてりや助けたり助けられたりは当たり前だ。で、だな——そういういきさつだから、昨夜のライの話も、まあ『そういうこともあるか』と思っただけなんだが……」

そこで一旦彼が、言葉を切る。その沈黙が何やら意味深に感じて、絵里は体を洗っていた手を止

めた。

「思っ……どうしたんですか？」

「話すかどうか迷ったが、どのみち、そのうちわかることだし……もしかすると、少々面倒なことになるかもしれない」

「え？」

「ライが本当に『界渡り』——ああ、こつちじゃそういうんだ。たまに、そういうた奴らが現れるらしい。といつても、何十年、何百年に一回とかの話ではあるんだがな。で、そうだとして、だ。

ライと同じ界渡りがつい二月ほど前に、ディアハラの王宮に現れたって話を聞いた。なんでも、その直前に『この世界を救う尊い者が現れる。心して迎え入れよ』って神託付きでな」

「は……え？」

「その界渡りは、見目いい女だって話だ。そいつが現れた途端に、王都近辺の天候は穏やかになり、作物が生き返ったように育ち始めたとかで、ディアハラじゃ『神が遣わしたもうた美しくも尊い界渡りの聖女様』のうわさで持ち切りだそうだ」

聞いたことのない地名らしい単語が出てきたが、そちらはとりあえず後回しでいい。それよりも、今のライムートの話に、絵里は心当たりがある——ありすぎる。

「……それって、もしかして片野さん？」

「さすがに名前までは伝わってはいない。ありがたい聖女様のお名前なぞ、下々が口にしていいものじゃないからな」

「でも、片野さんは私と一緒に誘拐されてこっちに来たはず。それなのになんで二か月も前に？」
異世界召喚を誘拐と聞いていいものかどうかは判断が分かれるところだろうが、絵里はそう思っている。なのでそう言ったのだが、その『誘拐』という単語と嘯みつくような口調に、ライムートが苦笑した。

「その辺は俺に聞かれてもな」

「あ、ごめんなさい……」

「いや、リイの気持ちはわかる——話を戻すぞ。そんな状況なんで、正直なところ、俺としては困ってる。界渡りなら神殿に身を寄せればいいんだが、もう一人界渡りがいて既に『聖女』なんて呼ばれてるなら、神殿はそっちだけが本物、後の者を騙りじゃないかと疑うだろう。で、リイの話ぶりだと、その相手とは、あまり仲がよくなかったんだろうか？」

ライムートの言葉に、絵里はこっくりと頷く。

元々、彼女——片野春歌とは、同じ講義を受ける間柄という以上の関係はない。

真面目に講義を受け、交友関係は女子がほとんどの絵里に比べ、春歌は単位が取れるぎりぎりの出席率で、キャンパス内外の付き合いは女子より男子のほうが圧倒的に多い——所謂、イマドキの女子大生だ。見かけも、化粧や服装が地味で髪を染めたりパーマをかけたたりしていない絵里とは正反対に、春歌は小物にまで気を使い、髪は明るい茶色のゆるふわウェーブだ。顔も、十人に聞けば九割が『普通』『地味』と評価するであろう絵里に対して、春歌のほうはかなりの確率で『かわいい』『美人』という返事が戻ってくるタイプである。

普通なら、教室で顔を合わせる程度の付き合いで終わるはずだが、大人しそうな絵里は、春歌に利用しやすい相手——つまりは『いいカモ』認定をされてしまっていた。

今回のレポート強奪についても、そんな背景があったからだ。

絵里からすれば、春歌が異世界召喚に巻き込まれたのは自業自得としか言いようがない。ただ、それを逆恨みされている可能性はあるし、少なくとも、日本にいたころより好感度が上がっているとは考えにくい。

「そんな相手がつくの昔に足場を固めてるところに、のこのこと出ていったらどうなる？」

「それは……」

「まあ、神殿も一枚岩じゃないだろうから、付け入るスキはあるかもしれない。だが、そうならそうなら、下手をすると勢力争いの駒にされかねん」

ライムートの説明を聞き、絵里は冷静に考えた。確かに、彼の言う通りかもしれない。

なぜ二人の出現にタイムラグがあるのかはわからないが、召喚陣の内側にいた春歌とそこからはじき出された絵里の差なのかもしれない。そして、神託通りに——察するに、マナの移譲に喜んでこちらの世界の神が気を利かせたのだろう——現れた春歌と、後からのこの『私が本物です』と名乗り出た絵里と、事情を知らない相手がどちらを信用するかは明白だ。しかも、相手は男性受けのいい、あの春歌である。おそらくは、絵里の存在については口をつぐみ、自分は真正正銘の『神様の御使い』だと周囲に信じ込ませている可能性が高い。

「……まあ、これは俺の予想でしかないし、実際のところは、確かめてみないとわからない。次の町

で神殿に行つて、それとなく様子をうかがつてみた上で、改めてこの先のことを考えたほうがいいだろうな」

「はい、お任せします。ごめんなさい、なんだか厄介ごとに巻き込んだりしたみたいで……」

「何、気にするな。別にあてのある旅でもない。たまにはこういうのも刺激があつていいもんだぞ」

ライムートはそう言うが、それが絵里に負い目を感じさせまいという思いやりであるのは間違ひなかった。それがわかつていても、絵里一人ではこの先どう動けばいいのか、見当もつかない。どこにその神殿とやらがあるのかもわからない状態では、彼の厚意に甘えるしかないのだ。

「ライさん……すみません。それと、本当にありがとうございます」

「気にするなど言つたらう？ それより、その『さん』づけはどうにかならんか？ どうも慣れなくて、尻が痒くなりそうだ。話し方も、もう少し砕けたものにしてもらえるとありがたいな」

「え、でも……」

「感謝してくれてるなら、そのくらいはいいだろう？ それと、ずっと気になつてるんだが、リイはどうしてそうしょつちゅう謝る？ 自分が悪くもないのにそういう態度だと、付け込まれるばかりだぞ」

日本で『すみません』は、ある種の接頭語のような扱いをされることが多く、絵里はなんの気なしに使つていた。けれど、それが通用するのは元の世界でも日本くらいなものだ。海外旅行の際には『自分に明らかな非があるとき以外は使用しないほうがいい』と忠告を受けることもある。

「あ……確かにそうですね。すみま——いえ、これから気を付けます」

「ああ、そうしてくれ。敬語もな。リイは育ちがよさそうだから難しいかもしれないが、よろしく頼む」

いえ、ごく普通の一般庶民ですよ、と返したものの、そういうライムートこそ実は育ちがいいのではないかと思ひ始めている絵里であつた。

言葉遣いはやや荒つぽいが、粗野な雰囲気はせず、仕草にも下品なところがないし、絵里に対する態度は紳士的だ。

不思議な人だ、と思う。

そして、こちらで最初に会つたのがそんなライムートで幸運だ、とも。

この先、自分がどうなるのか皆目わからないながらも、できればずっと、彼と一緒にいたい、と、絵里は願つた。

「私のせいで、馬に乗れなくてすみま……えっと、一緒に歩いてくれてありがとうございます」

「気にするな。たまにはのんびり行くのもいいもんだ」

所持品に鞍があつたことから予想できたように、ライムートは一頭の馬と共に旅を続けていた。けれど、絵里は馬に乗つたことがない。そう白状したところ、それなら……と、ライムートはあっさりと自分も騎乗をやめて、絵里と一緒に歩くことを選択した。

「それより、敬語」

「う……頑張りま、じゃなくて、頑張る」

「ああ、その調子で頼む」

そんな会話の後、まるで世間話でもするように、ライムートはこの世界について説明してくれる。ここは主神にフォスという神様をいただくフォーセラと呼ばれる世界であり、今いるのはウルカト国である。海沿いの細長い地で、水産が主な産業だ。無論、他にもたくさん国があり、その一つが先の会話で出てきたディアハラで、ここからは内海を越えた反対側になる。

国と国との関係は、概ね良好らしく、小競り合いはあるが、大規模な戦争はめつたに起こらない。というのも、フォスは平穏を愛する神で、この世界の大部分の者はその神を信仰しているため、「神の御心にそぐわない」行為として争いことは忌避されているのだ。

そして何よりも地球と違うのは、この世界には『魔法』があることだった。

「あの、ライセイ……ライは魔法が使えるの？」

「俺が、というか、マナを感じできるものなら、だれでも可能だな。もつとも、普通は自分の体を清潔に保つたり、小さな火を熾す、少量の水を出せるとかその程度で、俺もそんなところだ。強力な魔法を使うなら、それなりの才能と修業が必要になる」

ライムートはなんでもないので言うのが、絵里にとつては晴天の霹靂である。

ちなみに、絵里は知る由もないが、これらのことはあの『真つ白い空間』で神様がきちんと説明する手はずになっていた。それが、春歌というイレギュラーな存在が、これまたイレギュラーな行動——つまり、絵里を転移陣の外に突き飛ばすという暴挙に出たために、できなくなったのだ。

尚、魔法があるこの世界には、当然のように魔物と呼ばれる存在もいる。おおよそは、普通の獣が狂暴化した程度のものだが、中には魔法を使ったり、高い知性を持つものもいて、人々の脅威となっていた。

「そうなんだ……あと、ライは、どこの国の人なの？」

「シルヴァージュって国だ。ここからだとかかなり遠いな。そんなことよりだな……」

絵里の質問に言葉少なく答えた後は、また説明に戻る。その様子に、あまり深く尋ねないほうがいいと判断した絵里は、おとなしく聞き役に徹することにした。

そんなふうには話しながら歩き、旅慣れない絵里のために小休止を挟みつつ、目的地に着いたのは午後になってからだ。そのころには絵里は非常に大まかではあるが『この世界』に関する知識を得ることができた。

今彼女は、大きな港がある町の様子を興味深く眺めている。

港町はどこもそうなのかもしれないが、この町もずいぶんとぎわっているようだ。ひっきりなしに荷物を積んだ馬車が行き交っており、周囲の様子を見るのに夢中になっていた絵里は、危うくひかれそうになりライムートに慌てて引き戻された。

「さて、と……まずは教会だな」

春歌が聖女として認定されているのなら、その情報を得るのには教会に行くのが一番だ。そんなライムートの判断に絵里が異論を唱えるわけもなく、二人は町の中心部にあるそこへ直行した。

「ようこそ、我が教会へ。ディアハラの聖女様について、知りたいと仰られるのはあなた方ですか？」

この世界のほとんどの者が信者であるからか、教会は広く門戸を開いていた。

港町らしく活気のある通りを抜け、教会の建物に入って直ぐに出てきた女性に用件を伝えたところ、程なく別の男性が現れる。清潔そうな白い衣を着ている彼は、三十をいくつか過ぎたくらいの年齢で、どうやらこの責任者であるようだ。

「はい。聖女様のおうわさは旅の間に耳に入ってきておりましたが、どれもあやふやな伝聞ばかりです。聖なるフォスが遣わされた尊い方と聞き及んでおりますので、それならばしっかりと話を伺うべきかと考え、こちらをお訪ねしました」

しゃべるのは勿論ライムートだ。基本的に絵里は黙って話を聞いているだけである。

「それはそれは……よき信仰の持ち主でいらっしやいますな」

「お忙しいところに申し訳ありませんが、よろしくお願ひします。これは、些少ですが聖なるフォスへの喜捨としてお受け取りください」

そう言いながら、いくばくかの金銭を渡す。ザンバラの髪を後ろでまとめて軽く身なりを整え、日ごろの口調が嘘みたいに丁寧な言葉遣いをするライムートは、いつもの風来坊の印象を一変させている。

おかげで相手は、すっかり警戒心を解いたようだ。

「いえいえ、ご心配には及びません。実のところ、本日は他に訪れる方も少なく、かなり時間があ

りますので」

「ほう？」

「旅のお方とお見受けしますのでご存じないかと思いますが、昨日より久しぶりの豊漁なのです。ディアハラの聖女様のご威光が、やっとこのウルカトにも届いたのでございましょう」

主産業の漁業が忙しいなら、教会を訪れる者が減るのも道理だ。

「それはそれは……どうも町がにぎやかだと思いました」

「無論、この後はフォスへ豊漁のお礼を申し上げる者たちが押し寄せて、また忙しくなります。あなた方はちょうどよいころにおいでになられたわけですね」

神官本人は漁業に携わる者ではないが、それでも久しぶりの豊漁はうれしいのだろう。にこにこ笑いながら、快くライムートの問いに答えてくれる。

「さて、お聞きになられたいのは、聖女様についてでしたね。二月ほど前に、ディアハラ王宮に降臨されたことをご存知ですか？」

「ええ」

「実は、その前に大いなるフォスより、ディアハラの教会関係者に神託があったのですよ。それ以前のご信託がかれ三十年以上前のことの上に、今度の内容が『この世を救う尊い者が現れる心して迎え入れよ』とのお言葉でございましたので、ディアハラの教会ではその話でもちきりでした。勿論、フォスのお言葉に従い、準備万端でお待ちしていたそうです」

そして、神託からしばらく経ったある日のこと。ディアハラの王が謁見室にいたちようどそのと

き、光に包まれた人物が、突然目の前に現れたのだという。

「フォスが遣わされたお方は、まだお若くお美しい女性であられました。そして、その手に光り輝く聖なる書をお持ちでいらつしやったのです」

「聖なる書？」

「はい。水晶や玻璃はりのように透明で、しかも柔らかいという不思議な材質でできたものに収められた、今までに見たこともないほどに白い紙の束だそうです」

それを聞いた途端に、絵里がピクリと反応する。ライムートの袖を引く彼女を目線なだで宥め、彼は神官の話の続きに耳を傾けた。

「その光は直ぐに消えたりはしないのですが、聖女様にお許しをいただきディアハラの神官が確認したところ、細かな文字のようなものがびつしりと書かれていたものの、あいにく読めなかつたと聞いております。おそらくは、天上界の文字なのでございませう。聖女様はそれを『レポート』と呼んでいらつしやつたとの話です。そして、聖女降臨の知らせを受け大急ぎで駆け付けた王都の大神官様と王宮の魔術師長殿があれこれとお調べになられた結果、とんでもないことが判明したのです」

「というと、どのような？」

「貴方もご存知でしょうが、昨今のマナの減少はディアハラを含む各国で、非常に重大な懸案事項となっております。ところが、そのマナが大幅に回復していることがわかつたのです」

「ほう？ それは目出度めでたいことですが、今のお話からすると、もしかして……？」

「ええ。聖女様と、聖女様のお持ちになられた聖なる書のおかげでございませう。その証拠に、聖女様が降臨されて数日もしないうちに、ディアハラの空は美しく晴れ渡り、緑は生き生きとよみがえりました。ここ数年、不作だつた作物も、今年は豊作だろうといわれております。聖女様は、それほど恵みをこの地にもたらしてくださつたのですよ」

「なるほど。神託があり、そこまでありがたい功徳くどくがあるのなら、そのお人は正真正銘の聖女様なんでしょうな。しかし、よろしいのですか？ 我々のようなものに、ここまで話してしまつても……？」

「ご懸念はもつともですが、これは聖女様のご意向なのです。希望は分け隔てなく与えられるべき——つまり、聖女様をご降臨なさつたことを広く知らしめ、不幸を嘆なげく者たちに明るい未来が来ることを教えるべきであると。勿論、それによりよからぬことをたくらむ輩やからも出てきませうが、聖女様はディアハラの王宮にて大切に保護されていらつしやいますし、聖なる書につきましても王都の神殿が嚴重に嚴重を重ねてお預かりしていると聞いております」

「ならば安心ですな。話を伺えば伺うほど、聖女様は素晴らしいお人柄であるのがわかります」

「左様でございませう？」と、快活に笑う神官は、心底、聖女を信じているのだろう。絵里にとつては突つ込みどころ満載の話だが、ここでそれを言つても、いらぬ混乱を招くだけだ。

「よいお話を聞きました。ありがとうございます」

「いえいえ。こうしてお話することで、私も聖女様の御心に添うことができるのです。ご懸念には及びませぬ」

そうして神官との話を終え、二人は神殿を後にする。
その後、直ぐに宿屋を探し、その一室に落ち着いたのだが――

「――もういいぞ、リイ。よく我慢したな。色々、いいたいことがあるんだろう？」

荷物を置いて、備え付けの素朴な木の椅子に腰を下ろしたライムートの言葉に、我慢に我慢を重ねていた絵里が爆発する。

「……何、あれっ!? 信じられないっ、何が聖女よつ。おまけとか言われてたくせに、私を突き飛ばして……っていうか、私のレポートッ！」

あまりに興奮していたために、切れ切れの単語の羅列になってしまう。

「まあ、落ち着け……といっても無理か。とりあえず、その聖なる書とやらはリイのものだったことでいいんだな？」

さすがに年の功とでもいうべきか。ひとしきり叫んでやや興奮が収まったのを見はからってから絵里に声をかけてくる。

「聖なる書なんかじゃない、私のレポートよっ！」

反射的に怒鳴り返すが、彼に八つ当たりするのは筋が違うと気が付き、絵里はわずかに赤面した。「ご、ごめんさい。つい……」

「気にするな。それより、もう一度聞くんが、その『書』とやらは本当はリイのものなんだな？」

「私が書いたレポート――研究書というか、報告書っていうか、そんな感じのものよ。それを取

られそうになって、もみ合っていたときに誘拐されたのは話したでしょ？」

「ああ。それと、念のために聞くんだが、他にリイの世界から持ち込んだものはあるのか？」

そう尋ねられて、彼女はしばし考え込む。今着ている服とレポート、それから財布やスマホなどが入った中くらいの大きさのトートバッグくらいだが、バッグは今や海の底だ。

「いくつか持ってたけど、服以外は海に落っこちた時点でなくしちゃった。それがどうかしたの？」

「いや、さっきの話を聞いて思ったんだが、リイはこの世界にマナを齎すために来たんだよね？」

「来た、というか、連れてこられたって感じだけど。うん、そんなことを言われたよ」

「ふむ。ということは、リイの持ち物だったから、それが光っていたという可能性が大だな」

「……え？」

そのつぶやきに、絵里は怪訝な声を上げる。それを聞いて苦笑した後、ライムートが自分の推理を披露した。

「リイの話からすると、本当はその聖女様じゃなくてリイが『この世界を救う者』ってことになる」

「うん」

「さっきの神官様の話では、光っていたのは聖女様本体じゃなく、『聖なる書』だけってことじゃなかったか？」

「あ……そういえば……」

「俺は、リイが落ちてきたらしいところで光を見た。あの距離から確認できるくらいだから、荷物

だけが光っていたとは思えん。リイ自身が光を放っていたと考えるのが妥当だ。あいにくとその荷物とやらは海の底だし、さっきの話じゃ直ぐに光は消えてしまっただろうから確認するのは無理だが……いきなり海が凪いだのは、この目で確認した。おそらくは、この町が豊漁になったつても、リイがあそこに落ちたせいだ。ディアハラのマナの増量についても……持ち主がリイだったことで、『聖なる書』に多少のマナが宿っていたと考えられる」

「……あの話を聞いても、私のこと信じてくれるの？」

「俺は、俺自身が見たものを信じる。俺にはリイが嘘をついているようには見えん。だったら、どっちが本物かなんて自明だ」

この世界を救うため、減少したマナを補うために遣わされたのは、春歌ではなく間違ひなく絵里のほうだ。——きっぱりとそう告げられた絵里は、安堵のあまり思わず涙をこぼした。

「ライ……ありがとう」

「ああ、泣くな……いや、泣いてもいいか。本来なら、リイはディアハラの王宮で大切に守られているはずなのに、一人きりで放り出され、側にいるのはこんなおっさんだけなんだからな。寂しいし、心細いよな。すまん……」

ためらいがちに伸ばされた手が、優しく絵里の頭を撫でる。

「そんなことない……私、ライに会えて、本当に、よかったよ」

それほど我慢をしていた自覚はなかったが、やはり色々とたまっていたのだろう。気が付けば、絵里はライムートにしがみついて泣きじゃくっていた。

がちりとした胸板は、たやすく彼女の体を受け止めて、絵里がえぐえぐとしゃくりあげるたびに、体臭を感じさせる。日向と埃のにおい、それと汗の香りに混じる少しばかりの男臭さ。それは絵里にとつて、ひどく安心できるもので——

しばらく泣きじゃくった後、心労もあり、彼女はそのまま眠ってしまった。

そして、目が覚めた後——

「本当にそれでいいのか？」

「うん。ライが許してくれるのなら、このまま一緒にいたい」

『リイはこの先どうしたい？』と尋ねられた絵里は、泣きはらした真っ赤な目で、それでもしっかりとライムートを正面から見つめ、そう答えていた。

「今さら、私が本物ですって名乗り出たとしても、信じてもらえないと思う。それに王宮とか、聖女様とか、私の柄じゃないもの」

「それはそうかもしれないが……いや、柄じゃないってところじゃなくて、信じてもらえないかもしれないってことだ。しかし、俺と一緒に来るってことは、旅から旅の生活になるんだぞ」

「頑張る。それで、もしどうしても足手まといで仕方がなくなったら、置いていってほしい」

「ばかを言え。一度拾ったなら、最後まで面倒見るのが筋だ」

捨てられていた犬猫と同じ扱いみたいな気がした絵里だったが、それについてはスルーする。

正直、似たようなものだという自覚があった。

何しろ、自分はこちらの世界についてはまったくの無知だ。不思議と言葉は通じるが、生活習慣

など白紙状態である。勿論、こちらのお金など持ってないし、稼ぐ手段も知らない。

そんな状況で、「私が本物の聖女です」と名乗り出るつもりがないのなら、選択肢は一つしかないかった。

「ライにそう言ってもらえてうれしいけど、だからこそ、最初に言っておきたかったの。私にできることならなんでもするから、遠慮なく言いつけてね」

「なんでもって……子どもじゃない若い娘が、そんなことを口にするもんじゃない」

「え？ なんで？」

「だから、それは……いや、兎も角、それは禁止だ」

そんな感じの会話の後で、絵里はライムートの旅の道連れになったのだった。

第二章 旅の道連れはおっさん

「——疲れてないか？ 少し休憩をとるか？」

ライムートは面倒見がいい。加えて、大変なお人好しだ。

そうでなければ、たまたま行き合っただけの絵里を旅の道連れになどしなかったし、こうして何くれとなく気遣ってくれたりもしないだろう。

「ううん、大丈夫。それでも結構、体力ついてきているから」

街道沿いには徒歩でおよそ一日、或いは二、三日の距離ごとに町が存在している。日本という東海道五十三次のようなものだと思えばいいだろうか。その日のうちにたどり着ける距離ならそこに向かい、そうでなければ野営する。そんな生活にもずいぶんと慣れてきた絵里だった。

「そうか。なら、このまま進むぞ。この調子なら、次の町には日暮れ前に着けるはずだ。少し風が出てきたから、しっかりとフードを立てておけよ」

こちらにも四季がある。絵里がこちらに来たのは夏の終わりの季節だ。そして今、初秋から晩秋へ移り変わるうとしている。吹きつける風に深まる冬の気配を感じて、絵里はライムートの言葉に従い、防水性のあるマントのフードを被った。

「こうやって見ると、ライもすっかりこっちの人間だな」

「そう？ だったらうれしいな」

絵里が着ているマントはライムートが買い与えてくれたものだ。

その他、下着から何から一式全部そろえた。おかげで今の絵里は足もとのスニーカーを除き、すっかりこちら風の装いとなっている。足だけが元の世界のものなのは、こちらの靴があまりにも作りが悪く、絵里の足があつという間に肉刺だらけになったからだ。

「雨は降らんと思うが、少し急ぐぞ」

「うん」

保護者然とした振る舞いのライムートと、その後をひよこのようについていく絵里の姿は、見る者には微笑ましく映るだろう。さすがに親子には見えないと絵里は信じているが、叔父と姪、或いはなんらかの師匠とその弟子といった風情だ。そこに色恋はない。

これについて、絵里としては内心、かなり不満があった。

彼女は筋金入りのおじ専である。

早くに父を亡くしたことに加え、看護師である母が忙しく、寂しい時間が長かったので、おじ専というよりも、こじらせたファザコンといったほうが正解かもしれない。

とにかく絵里にとってライムートという存在は、命を救われたという出会いを抜いても、ぜひともゲットしたい相手なのだ。

しかし、その性癖故か、彼氏いない歴〓年齢を誇る絵里である。具体的なノウハウは持っていない。やみくもに突撃しても目も当てられない玉碎が待っていそうだ。

それに、それ以前の問題がある。

絵里はライムートの恋愛方面の守備範囲に入っているのだろうか。

一緒に旅をしている間の態度から推測すると、ライムートは、自分を絵里の保護者と考えているようだ。そこをまずなんとかしない限り、絵里の未来に光明は見いだせない。

そんなわけで、今のところ単なる旅の道連れとして、二人は街道を歩いていた。

「どうしたの、ライ？」

不意に、ライムートが足を止めたのを見て、絵里は不審の声を上げる。

周囲は——先ほどまでは開けた場所であったのだが、少し前から小さな岩山が続く細い道に差しかかっていた。細いといっても、余裕で馬車が通れるくらいの幅はあり、岩山が風よけにちょうどいい感じで、絵里としてはありがたい状況だ。

「少々、荒っぽいことになりそうだ」

「は？」

いきなりそんなことを言われても、絵里の理解が追いつかない。詳しい説明を求めて、もう一度口を開こうとしたときに、答えが向こうからやってきた。

「——くたびれたおっさんのくせに、やけに勘がいいな」

カーブになっていった道の先から、そんなセリフを口にしながら現れたのは、見るからに悪役ですといった風体の三人組の男である。

絵里はこの三人組に見覚えがあった。少し前に、自分たちを追い抜いていった連中だ。その折に、